

研究課題名	自己血管バスキュラーアクセス狭窄病変に対する経皮的血管拡張術におけるパクリタキセルコーティングバルーンカテーテルの治療効果
研究責任者名	広島大学病院 腎臓内科 教授 正木崇生
研究期間	2022 年 1 月 13 日(倫理委員会承認後) ~ 2023 年 3 月
対象者	2021 年 4 月から 2021 年 9 月までに、試料・情報の提供機関においてパクリタキセルコーティングバルーンカテーテルによって自己血管バスキュラーアクセスに対し経皮的血管拡張術を受けられた患者さん。
意義・目的	わが国の慢性透析療法の現況(2019 年 12 月 31 日現在)によると、血液透析患者数は 30 万人を超え、その多くは持続的な血液透析を施行するため自己血管もしくは人工血管を用いて血液透析用バスキュラーアクセス (VA; Vascular Access) を作製します。VA は血液透析患者のライフラインとなっており、しばしば狭窄や血栓形成をきたし、血液透析を无法正常に行うこととなる。狭窄を修復することは、透析患者の生存率を向上させる重要な治療手段である。VA 狭窄の修復は、大きく分けて外科的再建術と、透析用 VA に生じた狭窄部位を血管内に挿入したバルーンカテーテルによって拡張する経皮的血管形成術 (PTA; Percutaneous Transluminal Angioplasty) によって行われます。従来外科的再建術によって VA の開存が維持されてきましたが、現在では PTA が VA 狭窄の第一選択の治療として広く施行されています。しかし、PTA を施行しても短期間のうちに再狭窄をきたし、頻回に治療を施行しなければならない群が一定数存在し、これに対する対策が必要となっています。

ください。

研究に資料を提供したくない場合は、各受診機関にお申し出ください。お申し出いただいても不利益が生ずることはありません。

問合せ・苦情等の窓口

〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3

T e l : 082-257-1506

広島大学病院腎臓内科 教授 正木 崇生 (研究責任者)

広島大学病院透析内科 准教授 土井 盛博 (研究担当者)

広島大学大学院医歯薬保健学研究科腎臓内科学 大学院生 佐藤 彩加 (研究担当者)

研究機関：広島大学